



＜書評論文＞ 「心理化」の下位分類から構造的な把握に向けて：「コミュニケーション障害」を事例として

著者	江見 克基
雑誌名	KG社会学批評
号	8
ページ	17-26
発行年	2019-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028019

(1. 書評論文)

1-2. 「心理化」の下位分類から構造的な把握に向けて

——「コミュニケーション障害」を事例として——

片桐雅隆『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』

(ミネルヴァ書房、2017)

江見 克基

1 はじめに

昨今、社会の不安定化とともにかつてのような安定した自己アイデンティティの確立が困難になってきているといわれている。また、そうした語り方は社会学者たちの占有物ではなく、広く一般にも浸透しているかのようにみえる。社会と自己のあり方やその変化へのこうした関心に対して、歴史的かつ学説史的な説明を与えるのが本書『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』である。本書の著者である片桐雅隆（以下、著者）は、その際の観点を「認知社会学」¹⁾と名付ける。認知社会学とは「人々のカテゴリー化の作用に焦点を当てて自己や社会の存立を問う社会学」（本書：9）だ。ここでいう「カテゴリー」とは「自己やそれに対峙する他者がなにもものであり、また、どのように振る舞うべきか指し示す」（本書：10）ものである。この立場では、自己が相互行為において対峙する他者を前にしたとき、自己のあり方を指し示すカテゴリーを適用することによって自分とは何かが自覚され、自己が構築されと考える。このような自己を指し示すカテゴリーには、「役割カテゴリー、ジェンダーやセクシュアリティ、エスニシティやナショナルリティ、階級や階層、特定の時代や社会に固有な人間類型などのカテゴリー、自己言及的な語彙」（本書：13）が含まれる。重要なのは、認知社会学では社会を、人々がその成員として自己を定義するときに成立する「集合体」²⁾という視点から捉えることができる点である（本書：14）。この意味で「カテゴリー化、自己、社会は同時的に生起するもの」（片桐 2006：198）なのだ³⁾。

このように自己や社会を具体的で状況依存的な相互行為の場面におけるカテゴリー化の作用によって構築されとする認知社会学の立場では「個人化をキーワードとして現代という時代の自己と社会のあり方を探ること」（本書：2）が課題となる。こうして個人化の過程は「自己

1) 認知社会学は、『認知社会学の構想——カテゴリー・自己・社会』（片桐 2006）においてそのコンセプトが示されたものであるが、著者は本書を「認知社会学の展開」（本書：248）の書と位置づけている。

2) 「集合体は、程度の差はあれ秩序の差はあれ秩序だった人々の集まりであり、（小）集団、組織、国家、あるいは国家を超えたグローバルな関係などの概念が示すものを含んでいる」（本書：14）。

3) なお、ここでのロジックに関しては、本論の第三節を参照されたい。

をめぐるカテゴリー化の変化の過程」および「それに基づく集合体としての社会構築のあり方が変化する過程」(本書：17)として捉えられ、個人化のあり方やその評価は時代や社会によってさまざまな様相を呈する多元的な現象であることが示されている。

本稿は、「カテゴリー化」という成員の認知のあり方の水準から「社会」のあり方を問う認知社会学の展開にあたって用いられた方法を問題としてとらえ、具体的な事象の分析のためにどのような軌道修正を図るべきなのかを検討することを目的としている。以下に本稿の構成を述べる。まず続く第二節で本書の各章の内容を紹介する。第三節において、評者による本書の評価を述べる一方、第四節ではその課題を指摘したい。そして第五節では、評者の関心と引き付けつつ、本書の応用可能性を検討する。

2 本書の内容紹介

2.1 第一部「個人化の全体像」

第一部「個人化の全体像」では個人化の全体的な描写が試みられている。第一章「個人化と社会の消失——私化・心理化・再帰的個人化をめぐる」では、「社会」を「対面的な関係を越えた集合体であり、人々が個人的なトラブルに対してその集合体の枠での解決を期待しうる単位」(本書：30)と定義し、「私化」、「心理化」、「再帰的個人化」のそれぞれの過程で「社会の消失」がどのように論じられてきたかが述べられている。著者はそれぞれの過程で「社会の消失」が問題化されるとき、消失する「社会」の内実が多様であり、また「社会の消失」への評価も、否定的なものだけではなく肯定的なものもあることを指摘し、こうした差異に各々の時代的な特徴を読みとっている。

第二章「心理化の現代的展開」では、欧米社会における「心理化」の過程が分析される。ここでは、「心理化」がグローバル化やネオリベリズムの進展する以前の1960年代にまで遡ることのできる現象であることが確認されている。1960年代から1970年代の「解放の語り」の時代の特徴は、対抗文化のもとで「心理化」が「解放」として語られることにあるが、ここでは「心理化」によって必ずしも社会的な関心の喪失が帰結するわけではないことが指摘されている。1970年代から1980年代の「自己実現の語り」の時代の特徴は、政治的な社会から消費社会への移行を背景として、脱政治化した「自己実現」や「自己覚醒」の探求が関心事となる点にある。1990年代以降の「パーソナルな問題の語り」の時代では、「心理化」が「解放」としてではなく「抑圧」や「統治性」として語られるようになることが特徴的である。このように「心理化」という心や精神の語彙によって自己が構築されるようになる傾向は1960年代から一貫した長期的な過程であり、それは人々の考えや行動に意味を与えると同時に、集合体や社会を形成していくものだという点が論じられている。なおここで著者は、現代的な心理化をその特徴の点から「自己実現の心理化」と「管理的な心理化」に区分し、以上の時代的な展開と結びつけているが、第三の側面である「人間関係の感情意識化」については第五章で中心的に取り上げている。

第三章「心理化の歴史過程——心理化の起源を求めて」では、「心理化」の歴史過程を19世紀末の心理学の成立時、さらには近代社会の成立時にまで遡ることで、それがより長期的な歴史的現象であることが示される。そこで著者は市民革命、産業革命、商業化の進展するイギリス社会で、これまで「自己の自明性を支えてきた、生得的な社会的属性が希薄化することで、自己の自明性が揺らぎ、自己とは何かの根拠が自己意識に求められるという事態」（本書：91）の帰結として、ロックの自己同一性論に代表されるような「自己を起点として世界をみる視点」と「自己と社会、内部と外部という二項対立的な思考図式」（本書：91）が誕生したと説明する。このように近代社会の成立時にまで措定された「心理化」は、「社会の消失」を意味するどころか新たな社会の想像を伴うものであったとすることができる。それゆえに、ここで「近代的な自己と現代的な心理化された自己とを区別すること」（本書：106）の重要性が説かれることになる。さらに著者は現代的な「心理化」の段階においても、たとえば「社会の消失」の一方でナショナルなものが希求される点や、あるいはリベラルな民主主義を基調とするアメリカと「社会」民主主義を基調とするヨーロッパではそもそも「社会の消失」に対する危機意識が異なるという点から、「心理化」と「社会の消失」論の結びつきが歴史的・地域的に多元的であることを論じている。

第四章「戦後日本における個人化」で著者は、戦後日本における個人化の過程を、第二章で提示した欧米社会の枠組みと照らし合わせながらも、日本社会での個人化に特徴的な点を記述している。

2.2 第二部「自己像の変容」

第二部「自己像の変容」では、個人化の過程が「自律的で一貫した自己という近代的自己像」に与えた変化が考察されている。第五章「人間関係の感情意識化——心理化のもう一つの側面」で著者は、1950年代のリースマンの他者指向論を「人間関係のあり方を状況・関係依存的なものとする視点の先駆け」（本書：169）としながら、それを展開する現代の論者を「人間関係の感情意識化」を示すものとして取り上げる。そこでは、メストロヴィッチとヴァウターズの議論が参照され、「人々がナイスな感情によって、他者に思いやりの感情をもちつつ、過度に他者にかかわることのないように距離を取って接する」（本書：184）人間関係や、「マナーや感情表出をめぐる枠組みが希薄化したがゆえに、人々は、相互を露骨で直接的な感情の表出によって傷つけないように、反省的に自己を規制する」（本書：185）という傾向に特徴づけられる現代社会の人間関係のあり方が示される。

著者は、それらがリースマンの他者指向的社会の類型に当てはまるとしながらも、感情論的に補完されていると捉えている。他方で、1950年代のリースマンの議論が安定した新しいミドルクラスの社会モデルに基づいているのに対し、それらは「グローバル化やネオリベリズム的な政策の下で、職場、家族、地域などの安定性が崩れ、人生の設計や自己のあり方への反省性・再帰性が高まっている」（本書：188）社会を背景としている点で差異があることを著者は指摘する。その上で認知社会学的な見方から、「他者をどう定義し、また他者に対してどう

振る舞うかの基準を提供していた…（中略）…集合体の枠組み」（本書：185）が崩れ、「他者指向のあり方がより個々の相互行為の場面に依存してきた」（本書：188）現代社会の姿が描かれている。

第六章「自己の同一性とその不安定化——個人化と物語論の視点から」では近代的自己像の変容が示される。そこでは「物語的な自己の同一性論」、すなわち自己の同一性が意識の同一性に求められるものではなく、自己は共同体の物語のなかで位置づけられる（べき）とするテイラーやマッキンタイアら共同体主義者による議論が取り上げられている。これについて、著者は認知社会学の立場から「基本的には自己の同一性は、物語によって同一のものとして構築される」（本書：202）ものと定義する。だが著者は、自己の同一性論がそもそも社会的な規範を反映したものであると指摘し、ロックの議論を本質主義的に理解することと、テイラーやマッキンタイアの共同体主義の規範的前提に同調することをともに回避しながら、「自己の同一性が物語によって構築されるあり方が個人化、短期化、不安定化する」（本書：205）ことに注目する。ここで参照されるのが、自己の同一性が物語化されえず、ただその時々 の出来事の集塊となる「エピソード化」を問題とするエリオットとバウマンの議論である。著者は、この「エピソード化」を「短期化し不安定化した自己の同一性の構築」が「ますますその場その場での具体的な他者との交渉の中で行われる」（本書：216）ようになる現象として捉えている。

終章「単線的な個人化を超えて——ナショナリズムとコスモポリタニズム」では、「他者の縮小」や「社会の消失」として理解される個人化の過程に対し、社会を復権する動きとしてナショナリズムとコスモポリタニズムを取り上げ、個人化の過程が単線的に進行しない可能性を検討している。著者は「社会の消失」を示す「私化」や「心理化」が、その反動としてナショナリズムを生み、それに取って代わられるのか、あるいはそれらと並存するのかどうかを問い直す必要性を強調している。

3 本書の評価——体系的な枠組みと「社会の消失」論との距離

本節では、本書の評価点として以下の二点を挙げる。第一に、本書は様々な論者の議論を時代的・地域的背景をもとに分類することで、「個人化」の全体像を体系的に提示し、そのうえでより長期的・単線的な「心理化」の過程を抽出することに成功している。自己論という分野は、一見するとこれまで、時代や地域を超えてさまざまな論者によってかなりの程度で重複する論点が微妙に変調されながら繰り返されてきた観があるが、本書が提示する個人化や心理化の枠組みによってこうした状況の見通しは改善されるだろうと評者は考える。例えば、第五章で取り上げられる 1950 年代のリースマンの他者志向論と 1990 年代のヴァウターズやメストロヴィッチの「人間関係の感情意識化」論は類似した議論のように思われるが、著者は前者を安定したミドルクラス、後者を再帰性の高まる不安定な状況にその背景を求めることで両者の差異と類似点、それぞれの特徴を明晰に浮彫りにしている（本書：187）。なかでも「心理化」をめぐる議論では、具体的な事例がスピリチュアリティから労働までと、多岐にわたる領域に跨

っている状況がある。これに対して本書が提示する現代的な「心理化」の分類は、領域を横断して「心理化」というマクロな現象そのものを取り出して議論することのできる足場としての理念型をわれわれに提供している。また、こうした枠組みのもたらす効果は自己論の範囲にとどまるばかりでなく、「心理化」というキーワードのもとに、スピリチュアリティから労働問題までの広い領域を結びつけることが可能になるだろうと評者は期待する。

第二に、自己についてのカテゴリーの変容の記述だけでなく、そうした変容に対応する集合体や社会の構築のあり方にも目が向けられることによって、たんなる「社会の消失」論を超えた見方を可能にしている点に本書の新しさがある。自己と集合体あるいは社会を結びつける本書の視点は、ジョーン・ターナーの自己カテゴリー化論における「脱個人化」という知見を基礎としている。それは、「人々が集団の成員として相互に自己を定義するとき、集団が成立する。特定の個人ではなく集団の成員として自己をカテゴリー化すること、つまりは、カテゴリー化の『脱個人化』によって集団は成立する」（本書：14）とするものだ。しかし、こうしたカテゴリー化によって生じるのは認知作用だけにとどまらない。著者はここでシンボリック相互作用論の役割行為論やシュッツの類型論を援用し、「カテゴリー化することで、その人の行為を予測し、その過去の行為を遡及的に推測することができ、そのことによって…（中略）…カテゴリー化された他者との役割取得＝相互行為が形成される」（本書：15）としたことで、カテゴリー化作用と集合体が相互行為を媒介に結びつけられる視座を確立したのである。それゆえに「自己のカテゴリー化が、自己自身に言及的な心や精神、内面や内部などに還元される心理化した社会では、自己や社会をめぐる問題が心を起点に解釈され、相互の行為が形成され」、「私化、心理化、再帰的個人化は、そうした自己を位置づけるマクロな枠組み、あるいは大きな物語の喪失の過程、換言すれば社会の消失の過程と言える」（本書：15-6）のである。ここで重要なのは、カテゴリー化作用に注目することで、著者の考察は「社会の消失」に向かう個人化の過程がナショナルなものの復権や並存、あるいはコスポリタニズムに至る可能性へと導かれているという点である。そうした考察のもとで、著者は「個人化のゆくえは、近代的個人化から現代的な心理化に至る個人化の流れで見てきたように単線的に進むとは限らない」（本書：219）と述べる。そもそもすでにカテゴリー化作用によって社会が形成されるという点になるほどわれわれの自明性を揺るがす主張ではあるし、こうした見方はすでに前著『認知社会学の構想』の時点で用意されたものであった。しかし、著者はこうしたカテゴリー化作用の位置に繫留しつづけることで、社会の自明性ばかりでなく、「社会が消失する」という事態の自明性をも揺るがし続けている点に注目したのである。社会があるということも社会がなくなるといことも断定できない地平で、カテゴリー化作用によって社会の構築を根本から問い直す認知社会学の大胆な試みは本書において目を見張るものがある。

4 本書の課題——方法上の錯綜

次に本書の課題として、認知社会学を展開するにあたってその方法が明示されずに議論が進

行し、分析の対象の種類や、その対象が観察される次元の差異が検討されることがないという点を挙げる。著者の方法は第二章と第四章に典型的に示されている。そこで著者は、「その探求において断っておくべき点は、取り上げた素材についてである。素材は…（中略）…それぞれの時代における自己のあり方を分析した専門家や評論家の言説について求められている」（本書：119）と述べている。すなわち、これは（主には社会学者の）自己論を素材にそこで述べられている自己のあり方が時代や社会の特徴を反映するものであるとみなす視点である。自己のあり方そのものが第一次的に観察されるものであるとすれば、著者はそれを論じた社会学者による観察を参照し分類することで個人化の過程を描く第二次的な観察を行っているといえよう。このように著者による認知社会学の方法はある程度自覚的に用いられているものの、こうした方法はしかしながらその後の分析で一貫しているとはいえない。以下では、まずこうした方法論上の錯綜が、なかでももっともよく表れている具体的な例として、第五章の議論を確認し、次にそれがどのように本書の他の議論の方法と異なっているかを論じる。

第五章で著者は、現代的な心理化の一つとしてメストロヴィッチとヴァウターズの「人間関係の感情意識化」の議論を取り上げる。メストロヴィッチは、リースマンの描く他者指向論を感情のあり方に注目して読み直す試みとして、他者指向的な社会において具体的な他者への感情的な配慮が高度化する点を指摘した。メストロヴィッチはそうした社会を「ポスト感情社会」と呼び、そこでの感情を他者への「思いやり」と「距離」のバランスの中で達成されるパッケージ化された「ナイスな感情」と名付け、過去の記憶の共有に基づく感情の集合的沸騰は失われたとした。他方、こうした他者指向的な人間関係は「ナイスな感情に基づく調和的な人間関係を土台とするが、そうした感情意識的で調和的な人間関係は、一方で、同調しない、あるいはできない人を排除する働きをもっている」（本書：176）とし、ポスト感情社会における「いじめ」の問題を提示した。

ヴァウターズは、戦後の西欧社会で「マナーや感情表出において公的な規制が無くなる状況」（本書：178）を「インフォーマル化」と呼んだ。その背景には、社会の標準化に伴う公的な規制、すなわち「階級、ジェンダー、世代、国家などに固有なマナーや感情表出をめぐる規制」（本書：178-9）の弛緩がある。しかし、そうした状況におけるマナーや感情の表出は決して「何でもあり」の状況ではなく、相手を傷つける危険を回避するためには何が正しい方法かを個々人が判断し、反省的に自己規制をする必要がある点で「コントロールされた脱コントロール」といえる（本書：181）。

このようにして描かれた「人間関係の感情意識化」であるが、著者は次に認知社会学の視点からこれを捉え直すことを試みる。そこではまず、ミードの役割取得論とシュッツの類型化論の知見から相互行為において「相互のカテゴリー化が、相互の行為の予測を容易とし、相互行為はスムーズに進行する」（本書：186）という点を指摘する。そして、「人間関係の感情意識化」が示すのは、カテゴリー化と結びついた行為の枠組みが自明ではなくなり、「関係の手がかりを、その時々相互行為の場面において、反省的に求めなくてはならない」（本書：186）という状況である。この意味で現代社会は、「自他のカテゴリー化が不安定化し、相互の行為

の条件依存性が高まった社会」(本書：186)であるという。

この点は、カテゴリー化に焦点を当てつつも第二章や第四章で用いられている方法とは明らかに異なっている。つまり「心理化」という傾向のなかでも「管理的な心理化」や「自己実現の心理化」については、自己論を言説として用い、ますます「心や精神の語彙」によって自己が解釈されるようになる過程がそこで発見されたのであるが、最後に挙げた「心理化」の一要素である「人間関係の感情意識化」についてはメストロヴィッチとヴァウターズの議論を観察の対象であるところの「言説」としては扱わず、むしろ彼らの議論を先行研究として用い、そこでそれらは本質主義的なものとみなされている。そのため著者は「人間関係の感情意識化」において、カテゴリー化が行われる「土壌」としての相互行為の質的な変化を認めるのみで、これまでの分析で示したようにその過程において実際にどのようなカテゴリーが使われるようになるのか、あるいはカテゴリーがどのように変質するのかという点を等閑視している。

もっとも、認知社会学は純粋にカテゴリー化を主題とすべきであって相互行為の分析を実体的なものとして援用してはならないという趣旨の批判を評者は意図してはいない。そもそも単にカテゴリーのみを問題とするなら「人間関係の感情意識化」を著者が自身の議論のなかに組み込む必要はなかったともいえる。それにもかかわらず、著者があえてこれを取り上げたことで、ある特定の質的特徴をもった相互行為のなかで生じる「カテゴリー化作用」そのものに目を向けることができるし、その意味で認知社会学の豊かな可能性が示されていると評者は考える。しかしながら、相互行為という「土壌」の議論は、そこで用いられるカテゴリーの如何の議論と有機的に結びつけられることでより説得力をもつはずである。言い換えれば「人間関係の感情意識化」の議論は興味深いものの、「心理化」の他の側面と結びつけられるべきであった。

ところで樫村愛子が本書の書評において「『心理化』における3つの側面の互いの関係が構造的に論じられていない点では、議論の分かりにくさを招いている」(樫村2018:128)と述べているが、ここまで論じたのは、具体的にどのような構造的な議論が欠けているかという点を評者なりに指摘したものであるといえよう。

5 現代的事例としての「コミュニケーション障害」

5.1 現代的な心理化における位置づけ

ここで、本書の知見を評者の関心と結びつけ、その具体的な応用可能性を探りたい。評者の関心は、2010年代以降からネットを発祥として普及した「コミュニケーション障害(コミュ障)」あるいは「コミュニケーション不全症候群(コミュ症)」という言葉(以下、「コミュ障」)にある。「コミュ障」はとくに若者を中心に認知され、自分自身や他者を表現する言葉として高い頻度で使用されている(松崎2017:207-210)。またDSM-5には「コミュニケーション症群/コミュニケーション障害群 Communication Disorders」(日本精神神経学会精神科病名検討連絡会2014:431)という記述があることから、精神医学的な語彙とわれわれの日常生活

活の場面の近さが「コミュ障」という用語を特徴づけている。

こうした「コミュ障」は、本書が「自己を指し示すカテゴリー」に含めるところの特定の時代や社会に固有な人間類型に当てはまるだろう。以下では、著者の提示する区分に基づいて、2010年代の「コミュ障」という人間類型が、1990年代以降の「パーソナルな問題の語り」の時代の特徴を持っていながら、1970年代から1980年代に見られた「セラピー文化の拡散」という現象の一片も示していることを指摘する。

「パーソナルな問題の語り」とは、「アイデンティティやパーソナリティの問題が嗜癖や障害(disorder)の観点から見られる」(本書:75)ようになることである。その際、「お金、愛などの感情、過食や拒食、セックスなど、日常生活のあらゆる行動」(本書:76)がそうした観点で見なされ、セラピストなどの専門家への依存が強まるという「抑圧的なセラピー文化」という側面をもつ。さらに同じ傾向が労働の社会的問題を隠蔽する「統治性としての心理化」の側面もある。これらの側面は、現代的な「心理化」のうち「管理的な心理化」という傾向を示すものだ(本書:77-8)。さらに1990年代より以前の1970年代から1980年代に進行してきたとされる「セラピー文化の拡散」(本書:64-6)にも注目したい。それはトラウマ、多重人格、アダルト・チルドレンなどの語彙が「主にはマスメディアなどをおして拡散し、それらの語彙を自分の経験に当てはめることが、自己の解釈やアイデンティティの探求のための枠組み」(本書:66)となる現象である。

「コミュ障」という人間類型のカテゴリーにおいて、先に触れたように「障害」という精神医学の用語が用いられている点で、それは「抑圧的なセラピー文化」を引き継いでいるといえ、それが労働⁴⁾や教育⁵⁾の場面で問題を新たに構築しつつ個人的な解決へと導くとき、それは「統治性としての心理化」としての様相を呈するといえる。さらに、このように精神医学の語彙が拡散し、われわれの日常生活にも浸透しているという意味では、「コミュ障」を「セラピー文化の拡散」の典型的な事例としても捉えることができる⁶⁾。

このように、「個人化」や「心理化」を多元的な現象として分類したことによって、2010年代の現代的事例である「コミュ障」という人間類型のカテゴリーを分析することや、それが含む各要素のそれぞれの系譜をたどることが可能になる。この意味でも著者が示した枠組みは実に有効であると評者は判断する。本書以前の、たとえば「再帰的近代化」や「リキッド化」といった、漠然と「〇〇化以前／〇〇化以降」を区分する理論が自己論のなかで乱立していた状況では、精緻な分析は困難をきわめたに違いない。だが著者は、それらの理論を「語り」として取り扱い、それぞれの社会背景のなかに位置づけたことで、多元的な個人化の過程を描くこ

4)「経団連の企業調査によると新卒採用選考で特に重視する要素は、コミュニケーション能力が13年連続首位。2016年卒採用では約9割が挙げた」(毎日新聞2017年5月22日、東京朝刊)。

5)経済財政諮問会議の発案に基づいて2002年に発足した「人間力戦略研究会」による定義では「人間力」の構成要素として「コミュニケーションスキル」が挙げられた(人間力戦略研究会2003:10)。

6)松崎良美は、「日常会話など、“ホンネ”で率直な会話を楽しむような場において、気軽に用いられる精神疾患や精神障害に関連する表現、精神疾患や精神障害に関連するテーマから派生して生じたような用語」としての「メンタルヘルス・スラング」の存在を指摘する(松崎2014:199)。

とに成功し、そこで提示された枠組みは現代的な事例に対しても有効であるといえるだろう。

5.2 「人間関係の感情意識化」としての「コミュ障」

次に「コミュ障」という「パーソナルな問題」がまさに問題として生じる領域に目を向ければ、現代日本社会の社会的なコミュニケーションという場の質的な特徴が浮上してくる。このとき、本書の提示する現代的な「心理化」のうち「人間関係の感情意識化」の側面が有効な説明の枠組みとなるように思われる。メストロヴィッチとヴァウターズの議論が示す「人間関係の感情意識化」とは、相互行為の状況依存性が高まり、「ナイスな感情」や「コントロールされた脱コントロール」といったように基準なき基準を反省的に察知するためのより高次の自己コントロールが求められるようになる傾向である。「コミュ障」という言葉がリアリティを持ちうるのは、休み時間の教室の人間関係、仕事仲間との飲み会、友人づくりや恋人づくりなどといった社会的な場や機会におけるコミュニケーションの状況依存性が高まり、高い状況依存性をもった場面が、個々人の生の関心事として浮上してきたからではないだろうか。この意味で「コミュ障」が「人間関係の感情意識化」を示しているものと評者は考える。

先に評者は「人間関係の感情意識化」と現代的な「心理化」のその他の側面との水準の不一致を指摘し、そのことが心理化の構造的な把握を困難にしていると述べた。しかし、本書の知見を「コミュ障」という現代的な事例に敷衍したとき明らかになるのは、「人間関係の感情意識化」も「コミュ障」という2010年代における人間類型のカテゴリーを構成する主要な要素であるということだ。同時に「コミュ障」が前節で評者が述べたように「管理的な心理化」の傾向を示すとすれば、「コミュ障」という人間類型カテゴリーのうちに相互行為の質的な側面（の変化）と、相互行為において生じる問題を（精神医学的な語彙によって）語る方法が結びついた形で表現されているという事実が確認される。このように、相互行為という“土壌”の議論とカテゴリーの議論は結びつけることができるはずだ。

補足的に述べれば、両者の結びつきは2010年代にのみ該当するというわけではない。松谷創一郎はメディアにおける「オタク」の描かれ方を分析するなかで、1980年代の「オタク」という言葉がコミュニケーション・スタイルに注目する形で否定的な人格的資質を示すものであるという点を指摘し、それと同型の注目のあり方が1960年代の「ハカセ」、1970年代の「ガリ勉」、1980年代の「ネクラ」といった言葉のなかに評価のベクトルを変えながらも一貫して保持されてきたと述べる（松谷2008）。このように、松谷が論じた「コミュニケーション・スタイルへの注目」を「人間関係の感情意識化」と読み替えれば、2010年代の「コミュ障」をその1960年代から一貫した傾向の中に位置づけることが可能であるし、たとえば「私化」現象といった個人化のその他の側面との関連性も明らかになるであろう。

6 おわりに

本稿では、本書の評価として、個人化の過程＝自己のカテゴリーの変容の歴史の体系性が示

された点と、カテゴリー化作用への徹底した注目が必ずしも単線的ではない個人化の可能性を導出したという二点を挙げた（第三節）。一方、本書の課題として方法上の錯綜が「人間関係の感情意識化」を現代的な「心理化」のその他の側面から孤立させていることで、その枠組みが体系的ではあれ、構造的な把握が困難になっている点を指摘した（第四節）。最後に、現代的な事例としての「コミュ障」を取り上げ、本書の応用可能性を示すとともに、「コミュ障」というカテゴリーのなかで「人間関係の感情意識化」が「管理的な心理化」と結びついている可能性を指摘した（第五節）。

以上から、認知社会学やカテゴリー化作用そのものに注目するアプローチを今後展開していく際には、本書の議論を足場としながら、著者が試みなかった方法、すなわち相互行為の場で“実際に”生じているカテゴリー化を（他の論者による観察を持ち込むのではなく）第一次的な次元で観察するという方向性が有効であると評者は考える。

【参考文献】

- 樫村愛子, 2018, 「片桐雅隆著『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』」『現代社会学理論研究』(12): 124-29.
- 片桐雅隆, 2006, 『認知社会学の構想——カテゴリー・自己・社会』世界思想社.
- 松谷創一郎, 2008, 「〈オタク問題〉の四半世紀——〈オタク〉はどのように〈問題視〉されてきたのか」羽瀨一代編『どこか〈問題化〉される若者たち』恒星社厚生閣, 113-40.
- 松崎良美, 2017, 「“メンタルヘルス・スラング”を定義する——都内女子大生を対象とした横断研究より」『津田塾大学紀要』49: 197-216.
- 人間力戦略研究会, 2003, 「人間力戦略研究会報告書——若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める～信頼と連携の社会システム～」『総合教育技術』58(3): 80-3.
- 日本精神神経学会精神科病名検討連絡会, 2014, 「DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン（初版）」『精神神経学雑誌』116(6): 429-57.